

地域社会の中の商店街

～街は人と人とのコミュニケーションエリア～

秋田県八郎潟町一日市商店街

中小企業診断士 二瓶 哲

今回は地域イベントがきっかけで商店主が大きく意識が変わり、まちづくりにも大きく貢献している地域を紹介したい。

秋田県八郎潟町、秋田市から車で北に約40分、人口約8,000人、面積は4キロ四方、町の中心部を除いては見渡すかぎり水田地帯の小さな町である。この町の住民は「八郎潟というと『ああ、あの有名な干拓地ね』とよく言われるんですが『それは隣の大潟村です』と返すんですよ」ともらすほど、大潟村と勘違いされている。

実はこの町は、住民手づくりの一大イベント「路上ミュージカル」を通じた地域活性化を行っており、自治省（現、総務省）の外郭団体である（財）地域活性化センターの「地域イベント優秀賞」にも輝いた実績を持つ。イベントには多くの住民が参加し、今や路上ミュージカルは町の代名詞ともなっているユニークな町である。

ところで、この町の商店街は、どこにでもある近隣型の小さな商店街であるが「商店街なしでは町の活性化は語れない」と住民との一体感をかもしだしている。では一体どのような取組みによって商店街がここまで地域住民に愛されるようになったのか、そのいきさつについて振り返ってみたい。話は1990年に遡る。

1. 地域を変えるきっかけをつかむ

「イベントで町を変えていくことはできないか」、それまで町の有志や町役場の職員は毎日頭を悩ましていた。確かにイベントで多くを集客するにはタレントを呼ぶのが手っ取り早いですが、それは一過性のものでしかなく、地域には何も残らない。そんな折、町役場職員である畠山金一氏（当時企画調整課長）は東京に出張することになった。そのついでに、知人の紹介を通じて地域イベントの専門家と話をする機会を得たのだ。畠山氏は町の現状と将来の展望について専門家に伝えアドバイスを伺ったところ、「地域イベントは地域住民が主役にならなければダメだ。住民の手づくりミュージカルをやってみたら」と返された。「ミュ、ミュージカル？ 劇団四季でもあるまいし」畠山氏は首をかしげながらふるさとへと帰っていった。ところが、時間が経つにつれ身体の底から沸き経つ何かを感じてきた。「もしかしたら、これは八郎潟を変えるきっかけになるかも！」。

2. 湖上フェスティバルで住民参加のまちづくりに目覚める

八郎潟町には湖（八郎湖）がある。かつて海とつながっていたときは魚介類の豊かな恵みを受け清浄な湖であったが、干拓により海から遮断され閉鎖水域になってからは生活排水によって水質汚染が深刻化していった。一方、住民は八郎湖が生活と密接に関わらなくなってからは、湖についてあまり関心をもたなくなっていた。しかし、住民が自らこの問題を真剣に受け止めて、より良い町にしていくためには住民の環境に対する意識高揚が不可欠で、そのためにも「湖との共存」をテーマにミュージカルをすることを決意したのだ。だからといって単に架空のストーリーをつくりあげるだけでは意味がない。そこで、郷土史家の力も借りながら地元で伝わる民話・伝説を掘り起こし始めた。そして、ようやく八郎潟の守り神・八郎太郎の伝説をはじめ、水と人との関わりの深い様々な歴史にも打ち当たった。土地の伝説や歴史は、初年度は畠山氏にアドバイスをした専門家の手によってミュージカルの台本に仕立てあげられた。わずか8,000人の町で1,000もの住民が出演者やスタッフとして動員された。

1992年7月20日、湖上に設置された舞台でいよいよ本番の日を迎えた。ところが、突然の豪雨で中止。日を改め、会場も変えて町民体育館で実施されたものの、参加者の悔しさは図り知れない

ものがあつたという。そして翌年の1993年7月19日、おそらく全国で初めてであろう、漁船やヨットクラブ、中学生ブラスバンド、ママさんコーラスなども出演する湖上ミュージカルが遂に上演され、多くの人に感動を与えたのである。湖上ミュージカルでの2年間を通じ、地域が目標に向かって一つになることを町民自身が体感したのは大きかった。

2. 湖上ミュージカルから路上ミュージカルへ

大成功に終わった湖上ミュージカルはテレビでの全国放映をはじめ、新聞、雑誌等、マスコミにも大きく取り上げられ、全国的にも注目の的となった。当初尻込みをしていた住民からも「来年は何をやるのか」「来年はもっとたくさん出番のある役をやりたい」といった声が多く聞かれるようになった。出演者の中には商店街の人も多数加わっており、「湖の浄化は緊急を要する課題であるが、それは必ずしも湖でイベントすることにこだわらなくてもいいのではないか。来年は湖上ではなく商店街でできないか。そうすれば経済効果も見込める」と町に働きかけ始めたのである。

町の中心部に位置する一日市（ひといち）商店街は幅10メートルほどの道路の両側に商店と民家が混在している、いわば、どこにでもある小さな商店街である。夏には秋田県内で三大盆踊りのひとつとも言われる「一日市盆踊り」が催されるものの、ご多分に漏れず年々参加者も減少を辿り厳しい商環境にもさらされていた。「かつての賑わいを取り戻したい」。それまであきらめにも似た商店主の思いは、いっきに路上ミュージカルの夢が膨らんできた。

さて、「湖上でやったミュージカルを商店街でできないか」という漠然とした思いを商店主達が町に働きかけていったものの、いざ実施するとなると、どこにステージを組んでどのように人を呼び込んでいけばいいのかが皆目検討がつかない。それどころか、ステージを組む資金的な余裕などあるわけがない。そこで商店主の一人が「ステージは商店街の路上だ！」と意表をついた発言に誰しもがびっくり。これが、まさか地域イベントで全国的にも注目される路上ミュージカルになっていくとは誰も思わなかったという。

3. 路上ミュージカルに向けた日々

さて、路上ミュージカルの実施が決まり、いよいよテーマ設定となった。八郎潟町では、江戸時代、海の幸と近隣農村から集まる農産物の物々交換の市場が栄えていたのだが、路上ミュージカルでは、この市場を舞台にさまざまな水との関わりのドラマを再現しようと「一日市昔っこ物語」と題した時代劇ミュージカルに仕立てあげることになった。開催は一日市盆踊りと抱合せで、8月18日から20日まで3夜連続。盆踊りの前座として路上ミュージカルを催すというもの。しかし、ステージがあるわけでもなく、何よりも今回からはプロの手を借りることなく自らの手でイベントをつくりあげなければならない。路上ミュージカルに出演する者、台本を書く者、音響・照明など裏方スタッフまで、全てが商店街をはじめとする住民手づくりで仕上げなければならない。毎日が試行錯誤の繰り返しであったが、この活動を通じて商店主と地域住民との「心」の距離は着実に近くなっていった。

また、商店街でのミュージカルということもあり、モノ売りの原点でもある大道芸の手法を取り入れようということになった。それも単にプロの大道芸人に演じてもらうのではなく、専門家の指導を受けながら商店主自らが演じることにしたのが他の地域と違うところだ。この提案を聞いた仲間の商店主達は異口同音に「そんなのできるはずないだろ！」と一蹴した。案の定、初めのうちはとて人前で演じるようなレベルではなかったものの、稽古を重ねるうちに次第に商店主達は大道芸の魅力にとり付かれていった。そして見違えるように上達し風格も出てくるようになった。商店主による大道芸は、のちに路上ミュージカルとともに地域づくりに大きく貢献するようになる。

4. 路上ミュージカル、本番迎える

1994年8月18日、いよいよ路上ミュージカルの本番である。商店街の入り口には時代色を出すため地元の大工さんが丹念につくりあげた冠木門が建てられ、雰囲気も盛り上がってきた。路上ミ

ミュージカルは商店街路上の3ヶ所で演じられ、出演者やスタッフの総勢300人がその都度パフォーマンスエリアに移動するという大掛かりなものであった。「一日市盆踊り」の前座ではあるものの、商店街は人、人、人の波である。商店主も「うちの商店街にはこれまでこんなに人が来ることはなかった」と驚くばかり。同時に「俺達の手づくりで仕立てあげたイベントにこれだけの人を呼ぶとは、俺達もまだまだ捨てたものではない」という自信さえ生まれてきた。

「ゴーン！」路上ミュージカルの開始を伝えるドラの音が鳴り、辺りは静寂に包まれる。同時に商店街は江戸時代へとタイムスリップしていき、次第に幻想的な非日常空間を創り出していく。とても素人とは思えない演技力、照明、音響、さらにドライアイスやスモークなどの趣向を凝らした演出は観客を魅了し、次のパフォーマンスエリアへの移動時にはまるで戦場だ。終了後は割れんばかりの拍手が鳴り響く。

観客を惹きつけたのはミュージカルばかりではない。商店主達による大道芸も大きな評判を呼んだ。「ガマの身体からトロリトロリ、これがあらゆる病に効くガマの油でございます！」と素浪人姿で刀を振り回す「ガマの油売り」、「ア、ソレ、ソレ、ソレソレソレソレ、しだれ桜のできあがり」と南京玉スダレの芸はいろんな形をつくり観客を沸し、プロ顔負けの迫力で演じきる。観客からは「一緒に写真を撮ってください」と引っ張りだこで、まさに町の大スターとなってしまったのには当の本人も驚いた。

3日間で商店街を訪れた人は約3万人強という。人口8,000人の町ではとても考えられない動員を成し遂げたのは仕掛けた商店主達もびっくりする有り様であった。

5. 老人ホームへの慰問

路上ミュージカルを通じて、商店街は住民の生活を支える商業基盤としてはもとより、町内をはじめ町外との人的交流の場としての役割を大きく果たすことになった。また、商店主達もイベントを通じて、儲け主義一辺倒の「商売人」とは別の顔を見せることで住民との親近感がより深まっていった。特に大道芸については、「えっ？あの人あんなことできるの？知らなかった」と住民から大きな関心を集めていた。折しも、秋田県内のあちこちの老人施設からは「入居している高齢者のために大道芸をしてくれないか」との依頼が舞込む始末。全く予想もしなかった出番に戸惑いながらも快く引き受けているという。「ガマの身体から油がトロッと・・・」「アソレ！アソレ！さては南京玉スダレ！」路上ミュージカルの日に見せた晴れ舞台が老人施設や他所の地域のイベントへの出演までひろがっていったのである。

6. まちづくり計画の策定に商店主が参画する

路上ミュージカルをはじめ、老人施設への慰問を通じて、商店主達は商店街活性化についての取り組みはもとより、まちづくりというものにまで考えるようになった。確かに、現今では商売を行う環境は厳しい。しかしながら、彼等は短期的に商店街が活性化する方法を考えるよりも、長期的な活性化への取り組みの方が、商店街にとっても真にプラスになるのではと考えたのである。

市町村は、10年に一度、今後の地域づくりを方向づける総合振興計画を作成する。本来は住民と自治体職員が力を合わせて作り上げることになっているのであるが、コンサルタント会社などにまる投げの形で委託するのが殆どである。しかし、八郎潟町は路上ミュージカルに参加した住民によって路上ミュージカルづくり同様に、まったくの手づくりで振興計画をつくりあげたのである。この中心メンバーに商店街の人材が大きく関わっていたのは言うまでもない。

路上ミュージカルの第1回から早10年、今では町の代名詞になっているばかりか、「路上ミュージカルに関わってこそ町民の証」とまで言われるほどになっている。以来、老人施設の慰問も月1回実施しているという。これからも八郎潟町の商店街は人々に感動を呼び起こし、人と人を結ぶコミュニケーションエリアとしての役割を担い続けていくであろう。